

ケア理論の現在— コロナ・パンデミックにより露呈したもの

岡野 八代

報告の内容

- 1) 新自由主義的資本主義と闘うケアの倫理(ケア理論)の現在
 - 2) 露呈した、ポスト植民地主義・篡奪を繰り返し、武力国家と連携する企業による、人間・地球破壊
- 暫定的なまとめ 親密性・地域から、国境を越えた連帯へ

1. 20年遅れの、新しい世紀の到来？

- 2000年、戦争と暴力の世紀であった20世紀を反省して、新しい暴力なき世紀が訪れることを願ったのもつかの間、2001年9.11同時多発テロによって、20世紀に最大の超軍事国家となった合衆国が路線を変更するどころか、世界の警察としてその暴力文化を世界の隅々にまで浸透させようとする。
 - その一方で、80年代から英米を中心に根づき始めた新自由主義イデオロギーによって、国民国家は多国籍企業の下僕のように、企業が活躍しやすいよう、市民の福祉を削り、市民の税金を企業のインフラ整備のため(軍事を含んで)に横流ししはじめた。
 - 国民国家内でも貧富の差が広がり、文化的な分断も生じ、右派ポピュリズムが台頭する。
 - こうした世界的な緊張状態に対して、グローバルな連帯、99%のための政治といった呼びかけのなかで、注目されはじめた「ケア」。とりわけ、気候危機と、2020年のCOVID-19 パンデミック。
- 問題関心:2011年3.11 東日本大震災における福島第一原発事故以降、日本でもデモの時代がやってくる。女性たちは、#Metoo運動を初め、日本では拡がりをもったとはいえないものの、フェミニズム運動もまた、新しい草の根レベルで根づき始めたようにもみえる(新しいフェミ雑誌の刊行など)。こうした日本での(小さくはみえるが)運動を、世界的なケアへの注目のなかで捉え返してみたい。

ケアへの注目ー気候危機から、再生産労働まで(ナオミ・ク
ライン『地球が燃えている』大月書店、2020年より)

- <https://leapmanifesto.org/en/the-leap-manifesto/#manifesto-content> (2015)
- 一歩一歩の歩みではもう、気候危機は防げない、いまわたしたちには、「跳躍・飛躍」が必要である。
- カナダの土地をケアしてきた、先住民たちの知恵に学びつつ、根本的にカナダと世界を変革する。
- 「私たちはすべてが再生可能なエネルギーで動き、誰でもアクセスできる公共交通手段でつながれている国に住むだろう。そして、そんな国への移行を実現するための仕事や機会が、人種や性別による体系的な格差がないように設計されている。人間どうしのケアや地球のケアに携わることが、経済の中でもっとも急速に成長する部門となる」(ibid., 207).

we no longer get on where we need to go.

sign the manifesto >

so we need to leap.

This leap must begin by respecting the inherent rights and title of the original owners of this land. Indigenous communities have been at the forefront of protecting rivers, coasts, forests and lands from one of central industrial activities. We can balance this risk, and reset our relationship, by fully implementing the United Nations Declaration on the Rights of Indigenous Peoples.

Motivated by the creation that forms the legal basis of this country and bind us to share the land "for as long as the sun shines, the grass grows and the rivers flow," we want energy sources that will last for time immemorial and never run out or poison the land. Technological breakthroughs have brought this dream within reach. The latest research shows it is feasible for Canada to get 100% of its electricity from renewable resources within two decades. "By 2050 we could have a 100% clean economy".

We demand that this shift begin now.

There is no longer an excuse for holding new infrastructure projects that lock us into increased carbon dioxide into the future. The new line of energy development must be if you wouldn't want it in your backyard, then it doesn't belong in anyone's backyard. This applies equally to oil and gas pipelines, fracking in New Brunswick, Quebec and British Columbia, increased nuclear reactivity off our coasts, and to Canadian-owned mining projects the world over.

"Small steps will no longer get us to where we need to go. So we need to leap".

Time to Care: Unpaid and underpaid care work and the global inequality crisis (Oxfam 2020).

- 地球だけでなく、深刻化する貧富の差によって、ひとも家族も破壊されている。
- 「2019年、世界のビリオネアは、たった2153人にあるにもかかわらず、46億人のひとびとがもつ富以上をもっていた。この大きな分断は、特権的な少数者の富を、もっとも基本的なエッセンスアルワーカーー主に、世界中の女性や少女たちが担っている、無償あるいは低賃金のケアワークーに費やされる、膨大な時間よりも高く評価する、歪んだ、性差別的な経済システムから生まれた。他者によりそい、料理し、掃除をし、水や薪を運んでくるということは、社会とコミュニティの福祉と、経済を機能させるための、不可欠な日々の仕事である。ケアワークの重い、そして不平等な責任こそが、ジェンダーと経済的不平等を永続化させている」(ibid. p.2).



TIME TO CARE

Unpaid and underpaid care work and the global inequality crisis

www.oxfam.org



2017年から、ケアのない世界を変革するために、読書会 をしていたイギリスの研究者たちによって、刊行される。

「この世界は、ケアのなさ[無関心、無配慮、不注意、ぞんざいさ]が君臨する世界です。コロナウィルスの大感染(パンデミック)は、合衆国、イギリス、そしてブラジルといった国々を含む、多くの国でこのケアのなさが継続していることを明らかにしただけというてよいかもしれません。これらの国々では、まさにリアルな、差し迫ったパンデミックが襲ってくるというかなり以前からの警告を軽視し、むしろ遠くの、あるいは実際には存在していない脅威に対する大規模な軍備に何兆円もお金を無駄にし、結果、すでに豊かな人たちにお金を流し込んだのです」(ibid., p.1)。



『ケア宣言——相互依存の政治』より

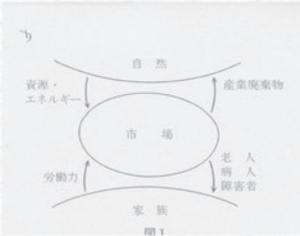
・ケアは、わたしたちが生きるあらゆる領域において遍在する営みであるにもかかわらず、資本主義経済、とりわけ新自由主義イデオロギーの下で、家族、あるいは自己責任として、一部のりびとに押し付けられてきた。

『宣言』は、あらゆる領域で組織を編成するさい(家族から、国際的諸機関まで)に、「ケアを前面に、かつ中心とする政治」が必要だと主張する。

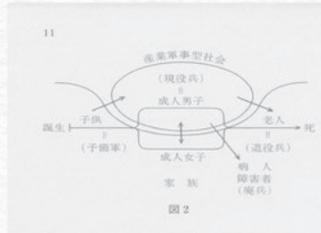
というのも、ケアとは、人間だけでなく、環境と地球のなかで、ひとは相互依存した存在である、という事実をまず、わたしたちに認識させるからである。相互依存という認識は、他者のニーズに寄り添い、身体的なつながりのなかでの相互行為(ケア)が、複雑な感情をひとに抱かせる——他者にふりまわされて疲弊する、コミュニケーションの難しさ、相手への深い愛着、ケアする者としての責任、わがままに応じてあげたい思い、自身へのケアが後回しになる、手間と時間がかかる——ことを受け取り、他者との共存をめぐる倫理を鍛える。

- 「それでは、いたるところで生じているこのケアのなさに対処するために、いったいどこから始めたらいいのでしょうか。ケアがコロナウィルスといった緊急事態のなかで、生死を握る力のひとつとして注目を浴びるようになったいま、遠い昔から、現在にいたるまで「実践のなかのケア」とわたしたちが名づける豊かな事例を掘り起こすことから始めることです」(19)。
- フェミニズムにおける共同保育やアフリカ黒人女性たちの子育て経験＝創造的なケアの形態を模索・他者への共感。
- 労働者協同組合(バルセロナ・コモンズ)や共有するために、さまざまなモノを貸し出す取り組み(eg. 図書館)。
- フェミニズム経済学・環境社会主義に影響を受けた経済改革(福祉に価値をおき、市場に任せない、強い規制)
- 政治がなぜ必要なのかを、ケアを中心に、「依存」を病理化しない方向で、再定義する。

2. 地球、環境、そしてひとを破壊しつくす、軍事的な資本主義経済



市場と、その外部（自然・家族）との関係
ヒトとモノのインプット・アウトプット（9頁）



同右、11頁

上野千鶴子『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平』
(岩波現代文庫2009-1990)

60年代、公民権運動やさまざまな解放運動のなから登場した、ラディカル・フェミニズム（＝女性の抑圧の根源には、家族制度が存在することを）が、市場の外に、「家族」領域を発見し、その知見を吸収しつつ、マルクス主義フェミニストたちは、「家族」と「市場」の編成のあり方を分析しながら、資本主義を批判し始めることになる。

「家族」という領域から「市場」は、ヒトという視座を労働力としてインプットし、逆に労働力として使いものにならなくなった老人、病人、障がい者を「産業廃棄物」としてアウトプットする。ヒトが、「市場」にとって労働力資源としか見なされないところでは、「市場」にとって意味あるヒトとは、健康で一人前の成人男子のことだけとなる。成人男子が産業軍事型社会の「現役兵」だとしたら、社会の他のメンバー、たとえば子どもはその「予備軍」だし、「老人」は「退役兵」、病人や障がい者は「廃兵」である。そして女は、これら「ヒトでないヒト」たちを世話する補佐役、二級市民として、彼ら共に「市場」の外、「家族」という領域に置き去りにされる（10頁）。

ケアの倫理と資本主義との対決 ケア実践と資本主義の相容れなさ

- なぜ、ケアに関わる多くの労働は、無償あるいは低賃金なのか？→反「生産」第一主義
- 社会が要請する「成人」になるには、どれほどの労力が必要か？→ 生きていることそのものの価値
- 資本主義にもっとも必要な労働力について、なぜ資本主義はこれほど冷淡なのか？→ 主体と客体の二元論への疑義 eg.自然破壊・無尽蔵な自然像・自然は人間主体にとっての客体
- そもそもなぜ、女性にケア役割が押し付けられてきたのか？→「依存」の見直し、新しい人間像
- ケア労働の多くは、労働集約的すぎて効率化がきかず、また生産物もはっきりしないため、市場価値がつきにくい。公的にその価値が評価されるが、公的な場には、ケア実践をしたこともないような人ばかりがいるのはなぜか？→ 政治そのものを見直す、公私二元論への抵抗

ケア実践のなかから生まれてくる、「ケアの倫理」が教えてくれること

- 傷つきやすい他者に対する、非暴力的な対応のあり方＝注視
- 「傷つきやすさvulnerable」: 放っておけば、死に至るかもしれない、関与することで傷つかなくて済む
- 「他者」: わたしの感知できない感情をもち、想像を超えた変化をする存在
- 「非暴力」: 積極的に、他者との間にわき上がる葛藤をコントロールする態度
- 「注視」: 自分の力に対する謙虚さを備えた、相手のニーズを読みとろうとする気遣い、重要な他者に見守られていることで、自らの中に価値をみだして(尊厳の在り処)

安全保障 security から、ケアへ

Fearless Cities: A Guide to the Global Municipalist Movement
(Oxford: New Internationalist Publications Ltd, 2017)



• “Fearless cities” の取り組み

=世界中の都市・町での取り組み:

新しいムニシパリズムの試みとは? = 「いかに、ムニシパリズムは、民主主義を急進化できるか(根本からの民主主義)、政治を女性化できるか、極右に対するオルタナティブをいかに提供しうるのか?」という共通の課題

ムニシパリズムにとって、政治を女性化することは根本的=「組織と権力の家父長的なモデルを疑問にふし、政治的課題についても、組織化の様式としても、ケアワークを中心に置くこと」(ibid.p.9)

=グローバル企業の手先となった国民国家に対抗し、政治を市民の手に取り戻す

まとめ 地域での、国境を越えた連帯をいかに培っていくのか?

- 相互依存するひと、といった(当たり前だが、政治的には自律(自立)を理想化するために、不可視化されてきた)人間像から、ホーリスティックな変革の道筋を考える(『地球が燃えている』、212頁)。

→これまでバラバラに取り組まれてきた問題のなかに連関を見いだすような思考方法を模索 (歴史問題、日本軍「慰安婦」問題、沖縄基地問題、エネルギー問題、シングルマザー・女性の貧困、教育・医療の貧困など)しなければならない。

=暫定的な答え 安全保障を中心とし、安全保障で人々を脅かす国家像批判

- 怖れなき都市・反逆する都市 (=安全保障ではなく、ケアを中心にコミュニティを建設する、国境のなさ、コスモポリタン)の経験に学ぶ、脱商品化、民主化、平等、未来への投資
- 現ヴァルパライソ(チリ)市長の言葉
- 鍵となるのは、「参加」=「参加とはそれ自体で、平等、民主主義、人間性でむすびついた仲間意識への欲求を実践することである」(*Fearless Cities*, p. 19)。